

授業と授業外学習をシームレスにつなぐ指導方法についての研究

ー学習者エンゲージメントを高める授業と授業外学習の在り方についてー

高知県立岡豊高等学校

教諭 松村 詩穂

高知県教育センター

指導主事 高橋 志穂子

高知県教育委員会事務局高等学校課

指導主事 田中 和恵

本研究の目的は、授業と授業外学習の内容に関連性をもたせることで、授業と授業外学習双方の学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するのかを明らかにすることである。授業外学習教材作成のための事前アンケート調査結果に基づき4種類の教材を作成、生徒に配付し、検証授業を通して生徒の学習者エンゲージメントが高まるのか観察を行うとともに、事後アンケート調査や授業者、生徒への聞き取り調査など多角的な視点から検証を行った。その結果、学習者エンゲージメントを高める取組が、授業と授業外学習のシームレス化を実現するために効果的で互いに相乗効果があることが示唆された。

<キーワード> 授業と授業外学習のシームレス化、学習者エンゲージメント、授業外学習教材

1 研究目的

(1) 研究課題について

高知県では、第3期教育等の振興に関する施策の大綱(改訂)・第4期高知県教育振興基本計画(改訂)において、『高知家』の全ての子どもたちが、急速に変化する予測困難な今後の社会を生き抜く力を身につけるための教育の推進」を基本方針の一つにしている。その基本方針に基づく施策の一つに、「授業改善サイクルの確立・授業と授業外学習を切れ目なくつなぐシームレス化」がある。

高知県内の高校生の授業外学習習慣について見てみると、高知県教育委員会が県下の高校1・2年生を対象に実施した高校生活に関する高知県オリジナルアンケートにおいて、「授業外でほとんど学習しない(15分未満)」と回答した生徒は、令和6年度は36.1%であった。高知県では、この割合を令和9年度までに30%以下に引き下げることを目標としている。英語学習に限れば、ベネッセ教育総合研究所(2019)が全国の高校1年生971名を対象に実施した「高1生の英語学習に関する調査」において「あなたは現在、学校の授業以外で、英語や英会話の勉強をしていますか。」という問いに対し74.6%が「していない」と回答した。全国的にも授業外で継続して英語学習に取り組む生徒は4分の1程度しかいないということになる。さらに、日本のみならず、「世界各国で若い学習者を取り巻く状況が急速に変化し、学習行動を阻害する要因が日々新たに生まれている。グローバル化が進んだデジタル時代を生きる若者たちは、さまざまなチャンネルの存在によって、常に大量の情報とコミュニケーションの機会にさらされている。その結果、学習者の心にはいついかなるときでも複数の影響が競合し合っていて、教育者や心理学者が考察を加えなくてはならないようなまったく新しい状況を生み出している」(マーサー, S・ドルニエイ, Z, 2022)ということから、これまで以上に生徒の学習に対する動機が実際の学習行動に結びつきづらくなってきており、生徒が意欲的に授業外学習に取り組むための指導の工夫が必要であると考えられる。

県内の高等学校では、生徒に課題を与え、その課題に関する小テスト等を実施することで授業外学習を促している。しかし、それだけでは生徒の学習に対する心理的負担や不安を高めてしまい、課題に取り組む間は授業外で学習したとしても、それ以後も授業外で学習し続ける意欲を維持させるには不十分である。また、全国の高等学校の課題として、中学校段階と比較して学校生活への満足度や学習意欲の低下が挙げられており、高等学校における教育活動を、生徒を中心に据えること

を改めて確認し、その学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するためのものへと転換することが急務となっていると報告されている（文部科学省，2021）。生徒が英語学習に対して前向きな姿勢をもつことができるようになるために、「小テストや成績に対する不安から、教師に課されて授業外学習に取り組む」状態から、「英語学習が楽しいから自ら授業外学習に取り組む」状態になるような授業実践や授業外学習への働きかけが必要であると考え。そこで、授業と授業外学習の内容に関連をもたせ、生徒が授業外で学習した内容が授業で活かされたと実感することにより、有能感や達成感を味わう経験をし、授業外でも継続して英語学習に取り組み、自ら英語力を高めることができるのではないかと考えるようになった。

(2) 授業と授業外学習のシームレス化について

高知県・高知県教育委員会（2025）は、「個別最適・協働的な学びの一体的な充実及び自立した学習者の育成に向け、授業と授業外学習を切れ目なくつなぐシームレス化を進めていきます。」と述べている。生徒一人ひとりが授業内容を授業外でより深めたり、授業外で深めた内容を授業の中で他者と共有したりすることで、主体的・対話的で深い学びを実現するとともに、生徒が自らの学びを調整することで授業外でも意欲的に学習し、日常的な学びを定着していくことで、予習・授業・復習のサイクルの確立を目指している。本研究では、「授業と授業外学習のシームレス化」を、「授業と授業外学習の内容をつなげること」と定義する。

(3) 学習者エンゲージメントについて

学習者エンゲージメントとは、感情やモチベーション（動機づけ）から引き起こされる学習行動や認知プロセスまでを包括的に捉えようとする概念である。ここでの学習行動とは、認知的関与や感情的関与といった内的側面と実際の学習行動を関連づけたものである（マーサー，S・ドルニエイ，Z，2022）。廣森ら（2024）は、エンゲージメントという言葉のもつ中核的な意味を「熱中・集中・夢中」としたうえで、モチベーション（動機づけ）とエンゲージメントについて、「モチベーションは『なぜ』私たちが行動するのかを説明し、エンゲージメントは『どの程度』私たちがその行動に関与しているかを表現します。」と示している。

モチベーション（動機づけ）に関連付けると、前項(1)で述べた「小テストや成績に対する不安から、教師に課されて授業外学習に取り組む」状態は外発的動機づけ、「英語学習が楽しいから自ら授業外学習に取り組む」状態は内発的動機づけであると考えることができる。生徒の学習者エンゲージメントを高め、授業と授業外学習のシームレス化を実現させるためには、内発的動機づけを充足させることが求められる。八島（2019）は、内発的動機とは、「それをする事自体から喜びや満足感が得られるような行動に関連した動機」と述べている。西田（2022）は、「内発的動機づけを充足するためには自律性・有能性・関係性の3つの心理的欲求を満たす必要があります。」と述べている。西田（2022）は、自律性の欲求とは「自分で自分の行動に責任を持ちたい、選択したいという欲求」であり、有能性の欲求とは「やればできるといった自身への期待や価値を持ちたいという欲求」、関係性の欲求とは「自分の周囲の他者と良い関係性を持ちたいという欲求」のことでありと定義している。

廣森（2024）によると、学習者エンゲージメントは基本的に、「生徒が学習活動にどれだけ積極的に参加し、関与しているか」という行動的エンゲージメント、「課題の解決に向けて、生徒がどれだけ思考を働かせているか」という認知的エンゲージメント、「生徒が学習にどれだけ楽しさや興味、幸福感を感じているか」という感情的エンゲージメントの3側面から捉えられることが多いが、外国語によるコミュニケーションといった社会的側面が重視される英語授業では、「英語授業内で、生徒が他者とのやり取りにどれだけ積極的に参加しているか」という社会的エンゲージメントも重要な役割を果たしているため、4側面から捉えることが多い（図1）。

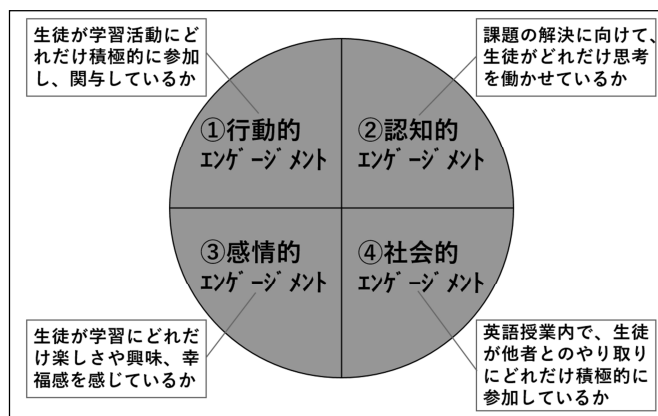


図1 学習者エンゲージメントの4側面（廣森（2024）の内容に基づき作成）

2 研究仮説

高等学校英語授業において、授業と授業外学習の内容に関連性をもたせることで、授業と授業外学習双方の学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するだろう。

3 研究方法

A高等学校第2学年25名（1クラス）を対象とし、高等学校学習指導要領における「英語コミュニケーションⅡ」の（2）読むことーI「社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を読みとり、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。」に関する指導領域を扱う単元で検証授業を実施する。授業前に生徒の授業外の学習習慣や学習内容等の実態について事前アンケート調査を実施し、生徒の実態に応じた授業外学習教材を作成する。検証授業では授業内の生徒の取組や、授業外学習教材への取組を観察する。単元終了後にも、生徒を対象に授業や授業外学習への取組について事前アンケート調査を実施し、授業と授業外学習教材の関連性をもたせることにより、生徒は授業と授業外学習双方に主体的に取り組むのか、また授業外学習時間は増加するのか、意欲は高まるのか、これらを含めて学習者エンゲージメントが高まるのかについて、行動的エンゲージメントの観点から考察する。学習者エンゲージメントを見取る際には、ドルニエイら（2022）の以下の記述を参考にすることとした（表1）。

表1 エンゲージメントと非エンゲージメントの特徴（ドルニエイら（2022）の内容に基づき作成）

	エンゲージメント	非エンゲージメント
行動的 エンゲージメント	行動の開始、努力・尽力、全力発揮、試み、持続的取り組み、専心、注意、集中、没頭、参加	先延ばし、諦め、落ち着きのなさ、中途半端、集中力の欠如、注意散漫、内向、燃え尽き・疲労、準備不足、不参加

(1) 授業外学習教材作成のための事前アンケート調査

これまで、A高等学校では、生徒の授業外学習習慣や授業外の英語学習の実態を詳細に調査することなく、教員主導で授業外学習課題を設定する場面が多く見られた。そのため本研究では、生徒の授業外学習習慣や授業外の英語学習の実態に応じた授業外学習教材を作成するために、事前アンケート調査を実施する。事前アンケート調査結果から明らかになった生徒の授業外学習習慣や授業外の英語学習の実態に即した授業外学習教材を作成し、生徒に配付し取り組ませることで、授業と授業外学習の内容に関連がある状況において、学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するのか検証する。事前アンケート調査の項目の設定にあたっては、ドルニエイら（2022）の「私たちの対象は言語学習者であるため、ニーズ・好み・願望・能力・文脈的状况といった5つの核となる領域を特定しなければならない。その回答は、一種のニーズ分析となり、タスクをデザインする際に組み込むべき要素を理解する手がかりとなる。」という記述を参考にしながら設定する。

ア 対 象：第2学年 25名

イ 実施時期：6月中旬

ウ 実施方法：Google フォームによるアンケート調査

エ 事前アンケート調査の内容：英語の授業外学習に対する意識

英語の授業外学習の目的

英語の授業外学習に取り組む時間

授業外学習で力を入れて取り組みたいこと

英語の授業外学習に取り組む際使用する教材

オ 事前アンケート調査結果：

事前アンケート調査「英語の授業外学習の目的」について、項目を①「宿題やテスト勉強だけでなく、自主的に英語の授業外学習に取り組んでいる」、②「宿題や定期試験、小テスト対策のために取り組んでいる」、③「定期試験や小テストのために取り組んでいる」、④「宿題が出されたら取り組んでいる」、⑤「授業外学習には取り組んでいない」とした。その結果、⑤を選択した生徒はおらず、全員が①～④のいずれかに取り組んでいることが分かった。それぞれ①12%（3名）、②32%（8名）、③36%（9名）、④20%（5名）となっている（図2）。このことから小テストや定期テスト等で良い成績を取りたいと思うことが英語の授業外学習に取り組む動機の一つになっていることが分かった。

また、事前アンケート調査「授業外学習で力を入れて取り組みたいこと」について、項目を①「単語や熟語を覚えること」、②「文法や文構造を理解すること」、③「長文が正確に読めるようになること」、④「長文が速く読めるようになること」、⑤「英語を聞いて、内容が理解できるようになること」、⑥「英文をすらすら音読できるようになること」と設定した結果、④、⑥を選択した生徒はおらず、①36%（9名）、②20%（5名）、③16%（4名）、⑤28%（7名）であった（図2）。このことから、検証授業の対象クラスでは、まとまりのある英文を正確に読むために、語彙力を増強したいと考える生徒や、リスニング力向上のために、英語の授業外学習に取り組みたいと考えている生徒が多いことが分かった。

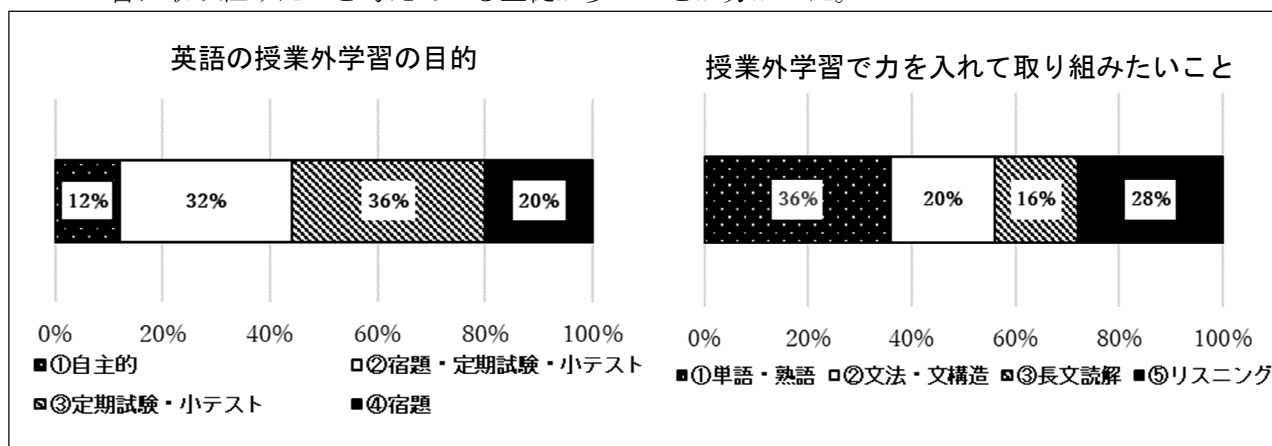


図2 授業外学習教材作成のための事前アンケート調査結果

(2) 授業外学習教材作成

新多（2020）は、「どんな生徒にも有効な、画一的な（one-size-fit-all）タスクは存在しない。第二言語を学ぶことは複雑な営みであり、生徒達は多様な個性を持っている。」と述べている。また、特定の学習者を意識してタスクをデザインすると、教材と学習者とのつながりが強くなる。この原則は、学習者エンゲージメントを喚起し、維持するための基礎となるものである（マーサー，S・ドルニエイ，Z，2022）。このことを踏まえ、生徒が授業外で自律的に学ぶ力を身に付けるために、研究対象のクラスの生徒に実施した事前アンケート調査から分かった生徒の授業外学習の習慣や実態に即した授業外学習教材を作成する。事前アンケート調査における「授業外学習で力を入れて取

り組みたいこと」の結果に基づき、授業外学習教材は、「A. 単語・熟語力強化タイプ」、「B. 文法・文構造理解タイプ」、「C. 長文読解強化タイプ」、「D. リスニング力強化タイプ」の4種類とする。また、生徒が授業外で英語を学習する平均時間が24.1分であったため、A～Dそれぞれの教材は、1日20分以内で完了する分量とする。予習の際、スキーマ活性化のために、本文に関連した5分以内の動画を視聴できるよう二次元コードを表示し、スマートフォンやタブレットなど、生徒が使いやすい端末からアクセスできるように留意する。

山岡・田頭（2023）は、単語や熟語の定着に関して、『量』の確保が前提になります。そのためには、英和対照のリストで覚えるなど『力技』の学習活動も、ある程度は必要です。多くの表現が、少なくとも『見たことがある』と思える状態になれば、覚えて使える段階にも近づきます。」と述べており、まずは生徒が繰り返し語彙にふれる必要性を示唆している。また、安木（2014）においても、生徒の自学自習における語彙学習で単語や熟語をリスト化し、数日後にリスト化した単語や熟語の定着を自分自身で確認する学習法が効果的であると示している。このことから、「A. 単語・熟語力強化タイプ」の作成にあたっては、授業で読む英文のなかから、初めて見る単語や熟語、もしくは見たことはあるが意味を覚えていない単語や熟語を生徒自身がリスト化し学習したうえで、数日後にリスト化した単語や熟語の定着を自分自身で確認するといった内容が有効ではないかと考える。

中田・鈴木（2022）は、基礎的な文法力をつけるためには「口頭ドリル・例文暗記・ディクテーションといった言語重視の学習」が効果的であると述べている。「言語重視」とは、語彙・文法・発音といった言語形式に注意を向けることを表す。そのため、「B. 文法・文構造理解タイプ」では、教科書で扱われている文法項目の演習問題や、1年生で既習の論理・表現Ⅰや論理・表現Ⅱの教科書などから同じ文法項目が使われている英文を引用し、生徒が言語重視の学習に取り組むことで、基礎的な文法を身に付けることができるように留意する必要があると考える。

卯城・石黒（2019）は、「英文を読んで理解する」ということは、読んだ英文を「自分の経験や知識と照らし合わせて理解すること」であると定義しており、読者の脳内では、読んだ内容を文化的な背景知識と結びつけたり、スキーマを活性化させたりしていると示している。まとまりのある英文を正確に読むためには、読んだ内容に基づいて「絵」を描くように、読み進めながら文脈に応じて適宜その「絵」に修正を加え、最後まで読み進めた段階で「絵」を完成できる力を身に付ける必要があると示している。また、中田・鈴木（2022）は、「単語の意味や構文解釈といった枝葉末節にとらわれすぎると、全体像を見逃してしまう可能性が高まります。」と述べており、まとまりのある英文において、文脈を追いながら正確に読む力を身に付けるために、「句や節といった意味のかたまりで文を区切る」ことが大切であると述べている。以上を踏まえ、「C. 長文読解強化タイプ」では、英文を逐語的に訳すのではなく、意味のかたまり（チャンク）で区切りながら読むことで、まとまりのある英文を正確に読む力を伸ばすことができると考える。

中田・鈴木（2022）は、英文を黙読するときの頭の中の発音と、同じ英文を聞いたときの音声が食い違うことがなくなるようにするために、シャドーイングや音読練習に十分に取り組ませることが重要であると示している。また、山岡・田頭（2023）は、リスニング力向上のために、「弱形で読まれる箇所や、音の連結や脱落などの音声変化が起きる箇所」へ注意を向けることが重要であると示している。「D. リスニング力強化タイプ」では、このような音声的特徴を捉えながらシャドーイングや音読練習に繰り返し取り組ませることでリスニング力を向上させることができると考える。

本研究の目的は、学習者エンゲージメントを高めることによる授業と授業外学習のシームレス化であるため、「小テストや成績に対する不安から、教師に課されて授業外学習に取り組む」という状況から「英語学習が楽しいから自ら授業外学習に取り組む」という状況を目指すべきであると考え。そこで、事前アンケート調査結果のうち、「英語の授業外学習の目的」において①「宿題やテスト勉強だけでなく、自主的に英語の授業外学習に取り組んでいる」と回答した生徒が意欲的に学習

に取り組むことができるように、教科書で取り扱われている内容から発展した内容を教材に取り入れる。また、主体的に英語の授業外学習に取り組むためのきっかけとなるように、ICTや辞書などを活用した発展的な学習法を提示する。配付する授業外学習教材は、それぞれの生徒が事前アンケート調査で回答した「授業外学習で力を入れて取り組みたいこと」に該当する教材1種類のみとするが、検証授業実施期間中は全種類の教材を教室内に置いておき、生徒の興味関心に応じて他の種類の教材を取ることができるようにすることで、生徒が自由に取り組む課題を選ぶことができるようにする。

(3) 検証授業

ア 対象：第2学年25名

イ 実施時期：9月上旬～下旬

ウ 実施時数：9時間

エ 科目・単元：英語コミュニケーションⅡ「Lesson6 Our Advanced Network Society」
〔文英堂『Grove English Communication II』pp.80-89〕

オ 検証方法：

検証授業実施前に、検証授業実施者と学習指導計画の内容を共有しながら、単元の目標や、授業外学習教材と授業内容の関連性について確認する。また、検証授業実施前に、対象生徒に授業外学習教材を配付し、教材と授業の関連性や使用方法を説明する。検証授業での生徒の取組を観察および録画し、授業内容と授業外学習教材が相互に関連合っている状況における生徒たちの学習者エンゲージメントを、主に行動的側面から見取る。

(4) 事後アンケート調査

検証授業終了後、以下の内容で事後アンケート調査を実施し、授業の目標達成度や授業外学習教材を使用することによって学習時間が増加したか、また授業や授業外学習への意欲は高まったかなどについて調査する。

ア 対象：第2学年25名

イ 実施時期：検証授業終了後（9月下旬）

ウ 実施方法：Google フォームによるアンケート調査

エ アンケート調査の内容：検証授業の内容理解度

授業外学習教材使用の有無

授業外学習教材と授業の関連性の有無

授業外学習教材使用による学習時間の変化

今後の授業外の英語学習について感じていること

(5) 事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査

事後アンケート調査結果を分析し、本研究の結果を考察する際に参考となるような回答をした生徒を対象に、聞き取り調査を実施する。聞き取り対象となった抽出生徒の使用教材や学習者エンゲージメント（表ではEGと表記）は表2のとおりである。

ア 実施時期：9月下旬

イ 実施方法：インタビュー形式による聞き取り調査

ウ 対象：第2学年4名

表2 抽出生徒の使用教材や学習者エンゲージメント

	使用教材	検証授業前のEG	検証授業でのEG	教材へのEG
生徒a	A. 単語・熟語力強化タイプ	中程度以下	高	中程度以下
生徒b	A. 単語・熟語力強化タイプ	高	高	高
生徒c	不使用	高	高	—
生徒d	A. 単語・熟語力強化タイプ	中程度以下	中程度以下	高

4 結果

(1) 検証授業

授業外学習教材と関連性をもたせた検証授業を通して、生徒の学習者エンゲージメントを見取るために、①授業観察及び録画分析、②検証授業実施者への聞き取りを行った。その結果、検証授業前と比較して顕著に学習者エンゲージメントが高まったと判断できる生徒や、授業外学習時間が増加した生徒はいなかったが、授業中に授業外学習教材と関連のある活動に取り組む際に反応のある生徒や、授業中に授業外学習教材を話題に上げるなど、授業外学習教材で学習した内容と授業に関連を感じた生徒は4、5名いた。

また、観察対象を事前アンケート調査から「学習者エンゲージメントが高いと判断された生徒」、「学習者エンゲージメントが中程度と判断された生徒」、「学習者エンゲージメントが低いと判断された生徒」に絞って観察すると、学習者エンゲージメントが高いと判断された生徒は、授業内容や状況に左右されず、常に速やかに活動に取りかかり、集中力を持続させていた。学習者エンゲージメントが中程度と判断された生徒は、活動に取り組むものの、集中力や注意力の持続が困難であり、授業の時間帯や活動の難易度によって学習態度にばらつきが見られた。学習者エンゲージメントが低いと判断された生徒は、居眠りや取りかかりの遅さなどが多く確認された。ただし、音読やディクテーションなど一部の活動では積極的に参加する姿が観察された。

(2) 検証授業事後アンケート調査

事後アンケート調査の内容「検証授業の内容理解度」は四件法で尋ねた。そのうち、検証授業の理解度は、授業外学習教材使用群では回答の平均値が3.57、授業外学習教材不使用群では3.45となった。使用群と不使用群の回答の内訳は以下の通りである(図3)。事後アンケート調査の内容「授業外学習教材使用の有無」は、使用群が14名、不使用群が11名となった。事後アンケート調査の内容「授業外学習教材と授業の関連性の有無」は、授業外学習教材使用群を対象に、「Lesson6の授業中、『授業外学習教材で勉強したことが活かされた』と感じた活動はありましたか。」、「各パートの予習で動画を視聴したことで、英文の内容理解がしやすくなったと感じましたか。」などを尋ねた。その結果、授業外学習教材使用群全員が授業の活動において授業外学習教材で勉強した内容が活かされたと感じていたことが分かった。また、「各パートの予習で動画を視聴したことで、英文の内容理解がしやすくなったと感じましたか。」については、14名中10名が肯定的回答をしていた。否定的回答をした生徒からは、「動画の英語が難しくあまり分からなかった」などの記述が見られた。事後アンケート調査の内容「授業外学習教材使用による学習時間の変化」は、使用群14名に対して、「授業外学習教材を使うことで、以前と比べて授業外の学習時間はどれくらい増えましたか。」と尋ねた。その結果、平均で14.1分増加した。一番多い生徒は30分以上増加したと回答した一方で、「変わらなかった、または減った」と回答した生徒も2名いた(図4)。事後アンケート調査の内容「今後の授業外の英語学習について感じていること」は、「今後もこのような授業外学習教材があれば、継続して取り組んでみたいですか。」、「このような授業外学習教材がなくても、今後も自主的に英語を勉強したいですか。」などを尋ねた。その結果、教材使用群14名のうち、13名が継続して授業外学習教材に取り組みたいと回答し、1名が取り組みたくなないと回答した。回答の記述から、苦

手な分野を克服できるような授業外学習教材を選びたいと感じている生徒や、どの分野もまんべんなく力をつけたい生徒、授業外で英語学習に取り組む時間を増やしたい生徒などがおり、生徒によって授業外学習教材に求めることが多様であることが分かった。「このような授業外学習教材がなくても、今後も自主的に英語を勉強したいですか。」は四件法で尋ね、回答の平均値は3.3であった(図5)。その理由に関する記述では、「受験で使うから」、「外部英語試験の対策をしたいから」などに加え、「英語の勉強は楽しいから」、「将来に役に立つから」など、学習者エンゲージメントが高いと判断されるような、英語学習に対して肯定的な回答も見られた。

授業外学習教材不使用群に対して、「授業外学習教材を使用しなかった理由は何ですか。」と尋ねたところ、「部活動等で忙しくて授業外学習ができなかったから」と「授業外学習教材の使い方が分からなかったから」を選択した生徒が同数で最も多かった(図6)。授業外学習教材を配付した際に使用方法や取り組むタイミング等について説明を行ったが、それだけでは生徒に授業外学習教材の使用方法を理解させ、授業外学習に取り組む心理的負担を和らげるには不十分であったと考えられる。

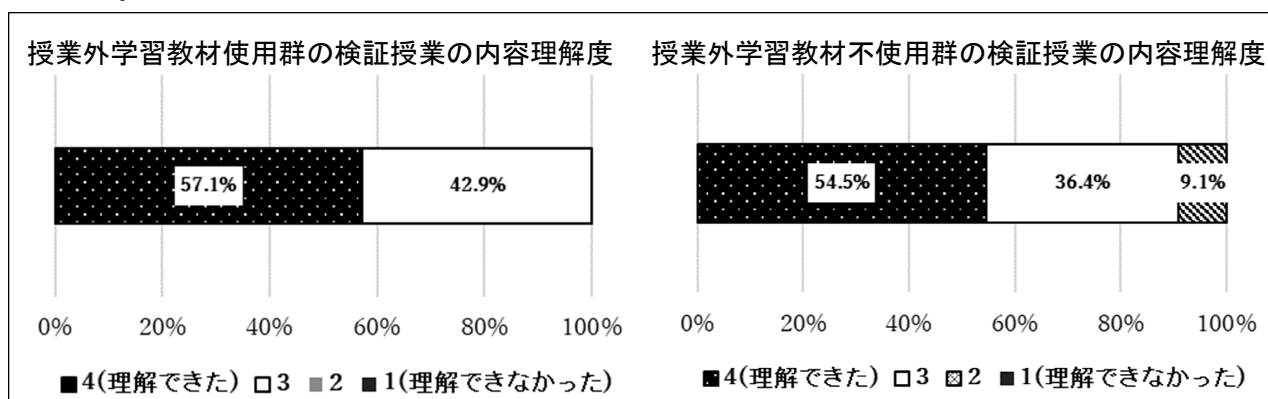


図3 授業外学習教材使用群および不使用群の検証授業の内容理解度

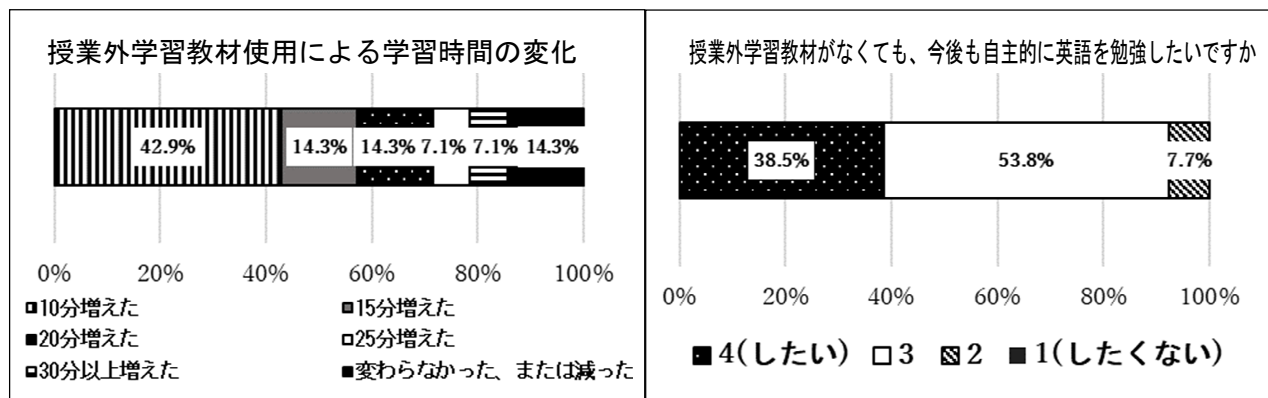


図4 授業外学習教材使用による学習時間の変化

図5 授業外学習教材がなくても、今後も自主的に英語を勉強したいですか

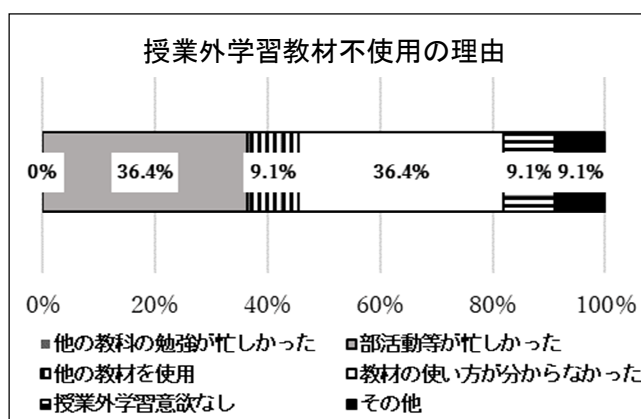


図6 授業外学習教材不使用の理由

(3) 事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査

ア 生徒 a (A. 単語・熟語力強化タイプを使用)

検証授業の観察や検証授業実施者への聞き取り調査、事後アンケート調査の結果から、授業へのエンゲージメントは高かったが、授業外学習教材へのエンゲージメントは中程度以下であると判断された生徒である。

事後アンケート調査の「今後もこのような授業外学習教材があれば、継続して取り組んでみたいですか。」という設問に対して「取り組みたくない」と回答しており、理由を「自分のやり方で勉強したい」と記述していた。具体的にどのような授業外学習に取り組んでいるのかを中心に聞き取り調査を行った。生徒 a は、「もともと、単語の知識がなかったので、単語が分からなさ過ぎて」自主的に語彙学習を始め、教科書の英文で初めて見る単語や熟語、もしくは見たことはあるが意味を覚えていない単語や熟語に下線を引き、英和辞典や英英辞典で意味を調べ、書き込んでいくという勉強方法を確立させていた。他に取り組んでみたい教材はあるか尋ねたところ、「文法・文構造理解タイプと長文読解強化タイプはやりたい」と答えていたことから、語彙以外の学習方法も理解し、英語の授業外学習に継続して取り組みたいと考えていることが分かった。

イ 生徒 b (A. 単語・熟語力強化タイプを使用)

授業へのエンゲージメント、授業外学習教材へのエンゲージメントのどちらも高いと判断された生徒である。

授業と授業外学習教材の関連性の有無や、それによって授業へのエンゲージメントが高まったかなどについて聞き取り調査を行った。その結果、「単語を学んでいたのので、日本語訳がスムーズにあって、ずっと話せて、先の問題に進めた」と述べていたことから、授業外学習教材の内容が授業で活かされたと感じており、授業へのエンゲージメントは高かったと考えられる。また、生徒 b は、「単語を覚えたいっていうのももらったんですけど、日本史とか、地学とか、単語みたいな、英語だけじゃなくて、ほかでも暗記があるので、そういうので覚えるときに役立つと思います」と述べ、教材で学んだ学習方法を他教科の学習にも活かしたいと考えていることが分かった。さらに、教材に取り組む際に視聴した予習動画の内容が他教科の授業でも取り上げられていたことにも触れ、英語の授業で学んだことが他教科にもつながることに学習の楽しさを実感したと回答した。生徒 b は、検証授業実施中に取り組んだ授業外学習教材が 1 種類のみであったことにも言及し、年間を通して授業外学習教材が配付されるなら、多様な英語学習方法を理解したいと考えていることも分かった。

ウ 生徒 c (授業外学習教材不使用)

授業へのエンゲージメントは高いと判断されたが、授業外学習教材に取り組まなかった生徒である。

事前アンケート調査において、英語学習に対して肯定的な回答をしていたが、授業外学習教材に取り組まなかったことをふまえて、その理由を中心に聞き取り調査を行った。その結果、「大体の内容が授業内で頭に入っているから、わざわざする必要ないかな」と感じており、「授業外で学習しないといけないという気持ちにならない」と述べていた。今回は授業外学習教材を課題として課していないため、提出を求めたり、成績に加味したりしなかったが、もし課されていた場合は取り組んだかについて尋ねると、課されていたとしてもやらなくてよいという気持ちは変わらなかつたろうと回答した。さらに詳しく質問していくと、「リスニングも、授業で音声を流してくれるし、わざわざ授業外でやらなくていい」と思っていると述べた。授業外学習の必要性を感じていない原因には、授業外学習を面倒に感じる気持ちと、授業内で学習が完結しており、それ以上に発展的な学習に取り組む必要を感じていない気持ちがあることも分かった。

エ 生徒d (A. 単語・熟語力強化タイプを使用)

授業へのエンゲージメントはあまり高くなかった一方で、授業外学習教材へのエンゲージメントは高いと判断された生徒である。

授業へのエンゲージメントがあまり高くなかったことについて、聞き取り調査を行った。その結果、生徒dは「この授業に対して進んで取り組もうと思っていたんですけど、すぐに終わったので、じゃあいいかとなりました」と述べていた。ペアで英語で話す活動に向け、教材を使って入念に準備をしていたが、授業ではペアで話す時間を十分に確保できていなかった。授業外学習で準備してきたことが授業で活かせなかったことによって授業へのエンゲージメントが低下したことが分かった。

授業外学習教材について、どのようなところが取り組みやすかったか尋ねると、これまで授業外での学習方法が分からず思うように取り組めなかったが、学習方法の目的別に複数の教材があり、それらをいつでも使うことができるようになっていたことで、4種類すべての教材に取り組み、授業外学習に意欲的に取り組むことができていたことも分かった。また、予習に関して「単語帳よりも覚えられた。前日やったのに、次の日も頭に入った状態で、動画も観たので、授業の時になっても覚えていたし、やりやすかった」と述べていた。今後は、授業外学習教材がなくても授業外学習に取り組むことができるようになるために、まずは授業外学習教材を使って英語学習の方法を身に付けたいという考えを持っていることも聞くことができた。

5 考察

(1) 授業と授業外学習のシームレス化

本研究では、「授業と授業外学習のシームレス化」を、「授業と授業外学習の内容をつなげること」と定義した。授業と関連性をもたせた授業外学習教材を作成して生徒に配付し、生徒がそれに取り組むことで、授業の中で授業外学習が活かされた実感を持ち、授業と授業外学習双方の学習者エンゲージメントが高まり、授業と授業外学習のシームレス化が実現するののかについて検証・分析を行ってきた。

検証授業の観察および検証授業実施者への聞き取り調査から、検証授業実施前から学習者エンゲージメントが高いと判断された生徒は、全員が事後アンケート調査で予習動画やその他の授業外学習が授業に活かされたと感じたと回答していた。また、英文の内容をイメージしたり、理解したりするために授業外学習教材が役に立ったことも実感していた。このことから「英語学習が楽しいから授業外学習に取り組む」という状況の実現に、授業と授業外学習をシームレスにつなぐことは有効であると推察される。生徒が授業外学習への意欲的な取組が授業理解に活かされると実感するためには、生徒の学習者エンゲージメントを高めることが必要不可欠であり、授業や授業外学習への生徒の学習者エンゲージメントを高めることと、授業と授業外学習のシームレス化には相乗作用があるのではないかと考えられる。そのために、授業における教師の発問や働きかけ、中長期的な視座に立った授業と授業外学習の包括的な計画の作成、実施など、生徒の実態に即した指導の工夫が求められる。

(2) 学習者エンゲージメントを高めるための授業者の働きかけ

授業と授業外学習をつなぐ際、二つ留意すべき点があると考えられる。まず、教室での学びが授業外学習につながる仕掛けを作ることである。事後アンケート調査結果から抽出した生徒を対象に行った聞き取り調査では、生徒cは、授業の中で授業者から授業外学習の必要性を感じるほど十分に知的な好奇心が刺激される発展的な問いかけがない結果として、学習内容を授業中にほぼ理解できると自己評価し、学びを授業内で完結させていたと考えられる。このような生徒の学習者エンゲージメントを高めるためには、教室での学びが教室外にもつながっていることを実感させ、授業の内

容について授業外でも深めたいくなるような授業者の働きかけや、生徒の知的好奇心を刺激し、「もっと知りたい」という気持ちにさせるような発問をしたり、場面を設定したりすることが求められると考えられる。

また、授業外学習が教室での学びにつながる仕掛けを作ることである。授業者は、生徒dのように単元の内容を自分の生活に引きつけ、クラスメイトと活発に自身の経験や考えを話そうと準備していた生徒が活躍し、そのような生徒に触発されて他の生徒の学習者エンゲージメントも高めることができるような場면을授業の中に設定することも求められる。そうすることで、学習者エンゲージメントの高い集団を形成することも可能であると考えられる。いずれにしても、教材の内容や生徒の学習にエンゲージしながら、クラスや生徒の実態に即した発問をするなど授業者の働きかけが重要な役割を果たすと考える。

(3) 授業と授業外学習教材の一体的な計画

事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査から、生徒が授業外学習教材の種類を選択できるということは、生徒の授業外学習へのエンゲージメントを高める要因となることが分かった。これは、自律性の欲求とも関連があるものと考えられ、生徒自らが使用する授業外学習教材を選択し、自身の学習に責任を負っているという感覚が、授業外学習へのエンゲージメントを高める要因となりうる可能性を示唆している。また、授業外学習教材を使用することで、英語学習の方法を理解できたと感じている生徒が多いことから、授業外学習教材自体も生徒の授業外学習への意欲を喚起する端緒となると推察できる。生徒aのように、自分に合った語彙学習のスタイルが定着している生徒も、その他の学習方法を理解するために、使用する授業外学習教材を選ぶことができれば、授業外学習へのエンゲージメントを高めることにつながると考えられる。生徒bや生徒dも、授業外学習教材を使用することで授業外の英語学習方法を理解し、いずれは授業外学習教材がなくても自主的に授業外学習に取り組めるようになりたいと考えている。このことから、生徒が学習方法を理解するまで、授業者が中長期的な視点をもって授業と関連性をもたせた授業外学習計画を包括的に設計することで、生徒は授業外学習が授業に活かされる実感を持ち、授業外学習習慣の定着につなげることができるのではないかと考える。

事後アンケート調査結果において、授業外学習教材不使用群に尋ねた教材不使用の主な理由は「使い方が分からなかったから」、「部活動等で忙しくて授業外学習ができなかったから」であった。このことから、授業外学習教材を使用しなかった生徒が、今後使用するようになるためには、授業外学習教材を導入する際にオリエンテーションを充実させ、生徒が使用方法を十分に理解し、短時間でも取り組むことができることを実感させることが必要であると考えられる。導入後は、生徒の授業外学習教材への取組を観察し、必要に応じて使用方法の説明や、個別指導などの支援を通して、生徒の授業外学習へのエンゲージメントを高めると同時に、面談等を実施し生徒が自身の学習習慣についてメタ認知できる機会をもつことで、授業外学習習慣を定着・充実させることができると考える。

したがって、授業と授業外学習のシームレス化を実現するためには、生徒の現状を理解し、高等学校入学から卒業までに生徒に付けたい力や資質・能力を明確に設定し、そこに至るまでの指導過程を、授業内外の学習活動を含めて構想する必要があると考える。授業内の生徒の姿を中心に考えてきたこれまでの学習指導計画に加え、授業外学習の内容も一体的に設計した授業を実践することが、主体的に授業外学習に取り組む生徒の育成につながるのではないかと考える。

6 成果と課題

(1) 成果

成果として3点挙げる。

生徒が自身の興味や実態に応じて複数の授業外学習教材から使用するものを選択できることが、

生徒の授業外学習に対する内発的動機づけの喚起につながることに加え、授業外学習教材の使用が英語の授業外学習方法の理解につながっていた。このことから、自律性の欲求の充足が、内発的動機づけを喚起し、学習者エンゲージメントを高める要因となりうるということが分かった。

また、二次元コードからアクセスするだけで簡単に授業に関連のある予習動画を視聴できるような教材を作成したことで、多くの生徒が予習動画を視聴した。デジタル化が進んだ現代の高校生にとって、「スマートフォンやタブレットで動画を見る」という行為は身近なものであり、学習と結びつけることで、学習に対する心理的負担の軽減につながり、学習者エンゲージメントを高めることにつながるということが分かった。

本研究では、仮説の検証のために事後アンケート調査結果抽出生徒聞き取り調査を実施した。授業外学習教材の使用による効果や授業の内容理解への影響についての聞き取り調査を通して、抽出生徒は自身の授業外学習について省察する機会を得たことにより、授業外学習習慣や学習方法に対するメタ認知が深まったものと考えられる。このように、生徒が自身の授業外学習習慣や学習方法について言語化し、振り返る機会を持つことで、授業外学習へのエンゲージメントを高める要因となりうるということが分かった。

(2) 課題

生徒の学習者エンゲージメントを高め、授業と授業外学習のシームレス化を推し進めていくためには、生徒の授業外学習習慣の定着を目指した中長期的な視点での組織的な指導計画の作成および実施が必要であることが課題として挙げられる。生徒は授業外学習教材の使用を通して、教科の内容を理解することだけでなく、その学習方法を理解することも望んでいることが分かった。生徒が、自己のレベルや状況に合わせた授業外学習教材を継続的に使用し、学習方法を理解することで、学習者エンゲージメントを高め、自ら授業外学習に取り組むようになるためには、高校3年間を見通し、教科や学年団全体での指導計画の作成、実施が求められる。また、複数の授業外学習教材を提供するためには、複数の教員が協働して作成にあたるのが欠かせない。今後は、教科や学年団の教員と協働し、授業外学習も包括的に設計された指導計画を作成し、授業と授業外学習をシームレスにつながぐことを意識した実践や生徒への個別の支援によって学習者エンゲージメントを高め、高校3年間の学習を通して自ら意欲的に授業外の英語学習に取り組む生徒の育成を目指していきたい。

【参考・引用文献】

- 文部科学省 (2018) : 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 外国語編 英語編、開隆堂
- 文部科学省 (2021) : 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料
- 高知県教育委員会 (2025) : 第 3 期教育等の振興に関する施策の大綱 (改訂) 第 4 期高知県教育振興基本計画 (改訂)
- サラ・マーサー, ゴルタン・ドルニエイ (2022) : 外国語学習者エンゲージメント 主体的学びを引き出す英語授業、アルク
- 石黒圭・卯城祐司 (2019) : 英語・日本語を読んで理解するとはどういうことか、英語教育、第 68 巻、第 10 号、pp. 10-11
- 中田達也・鈴木祐一 (2022) : 英語学習の科学、研究社
- 西田理恵子 (2022) : 動機づけ研究に基づく英語指導、大修館書店
- 新多了 (2020) : 自律的に学力を育てる課題とは?—第二言語習得の視点から、英語教育、第 69 巻、第 7 号、pp. 10-11
- 廣森友人・小金丸倫隆 (2024) : エンゲージメント×英語授業 「やる気」と「意欲」を引き出す授業の作り方、明治図書
- 廣森友人 (2024) : 学習者エンゲージメントについて知っておきたい 3 つのこと、英語教育、第 73 巻、第 3 号、pp. 36-37
- 八島智子 (2019) : 外国語学習とコミュニケーションの心理—研究と教育の視点—、関西大学出版
- 安木真一 (2014) : 英語力がぐんぐん身につく! 驚異の英単語指導法 50、明治図書
- 山岡大基・田頭憲二 (2023) : 英語授業デザインマニュアル、大修館書店
- ベネッセ教育総合研究所 (2019) : 高 1 生の英語学習に関する調査